

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

世界遺産ペナンによるこそ 出自の多様さを世界に誇る

篠崎香織(北九州市立大学准教授)



ジョージタウンの世界遺産登録を祝う垂れ幕(キャンベル通りで、2008年8月に筆者撮影)

2008年7月に、マラッカとペナン島のジョージタウンがユネスコ世界文化遺産に登録された。マレーシアでは、サバ州のキナバル自然公園とサラワク州のグナムル国立公園が2000年に世界自然遺産に登録されていたが、文化遺産の登録はこれが初めてである。

世界文化遺産と聞いて一般にイメージするものは、一目見るだけで圧倒され、誰もが「人類の遺産」と納得させられるような、悠久の歴史を誇る壮麗優美な建築物だろう。だがペナンとマラッカには、そのような建築物はあまりない。特にペナンは日本人にとって、ビーチリゾートとして知られてはいるが、世界史的な位置付けという点ではほとんど馴染みがない。ペナンが世界遺産に登録された時、筆者はクアラルンプールに住んでいたが、当地の日本人コミュニティの反応はほぼ一様に「えっ、あれが世界遺産？」だった。

ペナンの歴史は、1786年にクダのスルタンがイギリス東インド会社にペナンを割譲したことから始まった。ペナンは19世紀後半から20世紀前半にかけて、マラッカ海峡北部の金融・運輸・通信センターとして発展した。マラヤやスマトラ、タイ南部で生産されるタバコやゴム、錫をヨーロッパ市場に輸出し、その生産を支える労働力や労働者の消費する食糧・衣類・嗜好品をビルマ、中国、インドから調達した。そのためペナンでは、世界の様々な地域との結びつきが見られる。「ストリート・オブ・ハーモニー」と呼ばれるカピタン・クリン・モスク通りを北から南に歩くと、イギリス国教会のセント・ジョージ教会、ポルトガル人とタイ人との混血者(ユーラシアン)が設立した聖母の被昇天聖堂、道仏混交の広福宮(観音寺)、ヒンドゥー教

寺院のスリマリアマン寺院、ムスリム聖者を祭るナゴール寺院、南インド出身のムスリムが設立したカピタン・クリン・モスク、アチェ王族の血統を持つアラブ系の富裕な商人が設立したアチェ通りモスクなど、様々な信仰の世界に出会う。

世界遺産の登録申請は、「世界の文化遺産および自然遺産の保護に関する条約」の締約国の政府のみが行える。ある物件を世界遺産として申請するには、その物件の「際立った普遍的な価値」を説得的に提示し、その物件を保護・保存するための体制を整えておかねばならない。マレーシアでは官民が連携するなかで、10年以上かけて申請のための条件を整えた。マラッカとペナンの「際立った普遍的な価値」は、「マレー、中華、インド、ヨーロッパ諸文明間の交流の中で形成された歴史」と、「偉大な宗教・文化が会う場であったアジアの多文化主義の遺産と伝統の生き証人」という点にあることが強調された。

かつてマレーシアでは、「土着」の文化やイスラム教を核とした国民文化の創出を目指す政策を掲げ、それ以外の文化を積極的に認知しない時期があった。これに対してペナンとマラッカの世界遺産への登録では、「土着」の文明や特定の信仰のみに光を当てるのではなく、多様な文明や信仰が交錯してきた歴史を自分たちの遺産と位置付けている。外来者の血筋を持つ人や外来の文化も含め、多様な出自を持つものが固有性を維持したまま共存していることを、自分たちの遺産として世界に誇っている。

異なる文化や信仰の相互尊重と共存が、世界中で課題となっている。そのような中で、多様性を積極的に受け入れるマレーシア人の姿勢は、「世界遺産」に値するように思われる。

< 筆者紹介 >

1972年、千葉県生まれ。東京大学大学院総合文化研究科修了。学術博士。在マレーシア日本国大使館専門調査員などを経て現職。専門はマレーシアの地域研究で、民族間関係を研究している。日本マレーシア学会運営委員。「東南アジア史へのいざない 世界文化遺産ペナンからのアプローチ」(小尾美千代・中野博文・久木尚志編『国際関係学の第一歩』法律文化社、2011年)が近刊。